

平成 14 年度地域連携支援ソフト事業
周防灘 30 カイリ・潮の路県際間交流シンポジウム

「海で繋がるまちづくり・ひとづくり」
～ 周防灘を介した交流と観光を考える ～

報 告 書

1 .	開催概要	．．．．．	2
2 .	開催風景	．．．．．	3
3 .	主催者あいさつ	．．．．．	5
4 .	基調講演	．．．．．	7
5 .	パネルディスカッション	．．．．．	17
6 .	掲載紙	．．．．．	35

1. 開催概要

日時 平成15年1月31日(金) 13時～16時30分

場所 大分県東国東郡国見町
国見町生涯学習センターみんなかん ホール

主催者 国土交通省
東国東地域活性化協議会
周南地区広域市町村圏振興整備協議会

日程

13:00～ 開会 / 主催者あいさつ

国土交通省国土計画局特別調整課長 高橋洋一
東国東地域活性化協議会長 (国見町長) 金山尚學
周南地区広域市町村圏振興整備協議会長
(徳山市長)代理 企画部長 武居清孝

13:15～ 基調講演

多摩大学総合研究所 客員主任研究員 米村洋一
テーマ「海で繋がるまちづくり・ひとづくり」

14:30～ アトラクション

周南ジャグリングクラブ

14:50～ 休憩

15:00～ パネルディスカッション

テーマ「周防灘を介した交流と観光を考える」

- ・コーディネーター 大分大学工学部教授 佐藤誠治
- ・パネラー 涛音寮館長 和田木乃実(国見町)
昭和の町仕掛け人 金谷俊樹(豊後高田市)
JTB 徳山支店長 児子敏明(徳山市)
ハゼの実ロウ復活委員会 宮坂和枝(田布施町)
祝島ネット21事務局長 國弘秀人(上関町)
- ・アドバイザー 多摩大学総合研究所 客員主任研究員 米村洋一

16:30 閉会

2. 開催風景



国土交通省国土計画局
特別調整課長 高橋 洋一氏



東国東地域活性化協議会長
国見町長 金山 尚學氏



周南地区広域市町村圏振興整備協議会長
代理 徳山市企画部長 武居 清孝氏



会場風景



多摩大学総合研究所客員主任研究員
米村 洋一氏



会場風景



アトラクション(周南ジャグリングクラブ)



アトラクション(周南ジャグリングクラブ)



大分大学工学部教授 佐藤 誠治氏



パネルディスカッション



湊音寮館長 和田 木乃実氏



昭和の町仕掛け人 金谷 俊樹氏



JTB徳山支店長 児子 敏明氏



ハゼの実ロウ復活委員会
宮坂 和枝氏



祝島ネット21事務局長 國弘 秀人氏



会場風景

3. 主催者あいさつ

国土交通省国土計画局特別調整課長 高橋 洋一氏

周防灘 30 カイリ・潮の路県際間交流シンポジウムを開催するに当たり一言ご挨拶を申し上げます。まず初めに、本日このように多くの方々にご参加いただきましたことにつきまして、主催者を代表いたしまして厚く御礼申し上げます。さて、ご当地東国東地域は、半島地域という不利な地形の中、県都大分市からの交通アクセスも大変不便な状況にあると聞いております。このような状況の中で、昭和 43 年に国見町と山口県徳山市との間に周防灘フェリーが就航し、ピーク時には自動車 10 万台、乗客 27 万人を運ぶなど、盛んな交流が行われるようになりました。しかしながら、その後の高速交通網の発達等により、住民の交流は海路から陸路へと移り、国見町と徳山市両地域の交流もやや薄れてまいりました。このため関係市町村では、平成 10 年以降、東国東地域と周南地域を周防灘 30 カイリ・潮の路交流圏と位置づけて、情報発信やスポーツ、文化などの相互交流を図ってきたとお聞きしております。これらの一環として、今回、それぞれの地域の自然や歴史、文化、観光などをテーマにして、交流と連携による個性豊かなまちづくり・人づくりを目的としたシンポジウムを開催する運びとなりました。また、今回は、広域観光マップの作成や広域観光ルートの提案にも取り組んでおります。国土交通省では、21 世紀の国土のグランドデザインの「参加と連携による地域づくり」を効果的に推進する方策として、既存の行政区域である都道府県を越える連携事業に対し、特に支援しているところであり、その一環として本日のシンポジウムを行うものであります。本日のシンポジウムでは、東国東地域活性化協議会および周南地区広域市町村圏振興整備協議会の御協力の下、地域おこしに挑戦しておられるの方々をお招きして、講演やパネルディスカッションを行うこととしております。本シンポジウムを通じて、地域の特性を生かした、新たな交流の拡大について有意義な提案がなされるものと期待しております。皆様からの忌憚のない活発なご議論とご参加をいただきまして、実り多きシンポジウムにしてまいりたいと考えておりますので、よろしくお願い申し上げます。

東国東地域活性化協議会長(国見町長) 金山 尚學氏

本日は、周防灘 30 カイリ・潮の路県際間交流シンポジウムを開催いたしましたところ、国東半島地域をはじめとする県内各地また山口県周南地域からも多数の皆様方にご参加をいただき、誠にありがとうございます。さて、ご案内のとおり山口県上関町で 4 年おきに開催されます海を渡る祭り、神舞神事をはじめとして、大分県と山口県とは周防灘を介して古くから交流の歴史があるわけでございます。さらに、かつて陸の孤島と呼ばれた国東半島も、昭和 43 年に国見町と徳山市との間に周防灘フェリーが就航してから、人や物の交流が活発化するなど、交流の歴史は現在に続いているわけでございます。近年では、九州・中国地方の高速道路が整備され、競争が激しくなっておりますが、周防灘フェリーは地域産業の振興に欠かせない交通機関として、依然重要な役割を果たしております。周防灘を介しまして、一衣帯水の関係にあるこの国東半島地域と周南地

域の交流をさらに一層促進するため、フェリーを利用して、山口県周南地域の皆様とともに、平成 10 年度から周防灘 30 カイリ・潮の路県際間交流と称しまして、地域づくりやスポーツ・文化など、多様な交流を積極的に推進をまいりました。21 世紀は地域連携、交流の時代です。お互いの地域を理解し合い、交流人口の増加による地域の活性化を図ることがぜひとも必要であります。そういった意味で、本シンポジウムにおいて、このように多くの方々が観光や産業を通じた交流について考え、お互いの地域を理解することは、極めて重要で意義深いことでもあります。本日は、多摩大学の米村先生による基調講演や周南ジャグリングクラブの皆さんによる大道芸、さらに、大分大学の佐藤先生をコーディネーターとして、5 名のパネリストの方々によるパネルディスカッションが予定されております。ご参加いただきました皆様方には、本シンポジウムの開催を契機に大分県と山口県の地域連携が更に一層進みますよう、ご理解とご協力をお願い申し上げます。

周南地区広域市町村圏振興整備協議会長(徳山市長)代理 武居 清孝氏

私、周南地区広域市町村圏振興整備協議会の事務長をしております徳山市役所企画部の武居と申します。市長に代わりまして、ご挨拶をさせていただきます。周防灘 30 カイリ・潮の路県際間交流シンポジウムの開催にあたり本日このように多くの方々にご出席いただき、厚くお礼申し上げます。さて、ここ大分県の東国東地域と山口県の周南地域との繋がりにつきましては、徳山市の歴史をひもといてみますと、周南地域の遺跡から、これは徳山市の黒髪島というところがございますけれども、縄文時代の後期に使用したと考えられます大分県姫島産の黒曜石が出土したという記述がございます。縄文式後期と言いますと、2000 年も前のことになるかと思いますが、それだけ非常に古くから交流があったと考えております。また近年におきましては、平成 10 年度から交流人口の拡大を図り、活力ある地域づくりを行うために、さまざまな交流事業を行ってきたところでございます。昨年 11 月 23 日、24 日にワールドカップ開催にちなんで、東国東・周南両地域の子供たちによるサッカー交流も実施いたしました。このように過去 5 年間で 14 回を数えるいろいろな事業を実施し、交流を重ねてきたところでございます。さらに今年度は、国土交通省の地域連携支援ソフト事業の採択に伴い、東国東と周南両地域の観光スポットなどが掲載された観光マップの作成、また本日のようなシンポジウムを開催することができました。これからの地域づくりは広域的な視野と斬新なアイデア、そして地域の歴史・文化を競う独創性がなければならいと考えております。そういった意味からしますと、このような県境を越えた広域的なつながりを持つということは非常に有意義なことであると思っております。これからも人的交流や文化交流の活発化を目指した交流事業を推進し、東国東と周南両地域の人と人とのつながりやそれぞれ地域資源の再発見、新発見につながっていけば、より個性と魅力ある地域づくりができるのではないかと考えております。ご参集の皆様方には、今後とも両地域の活性化のために、ご支援・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

4. 基調講演 「海で繋がるまちづくり・ひとづくり」

多摩大学総合研究所 客員主任研究員 米村 洋一氏

ただ今、紹介いただきました米村でございます。私の誕生日は海の日です、7月20日。先程紹介いただきましたように瀬戸内海は周防大島で育ちましたので、海には格別な思い入れがあります。今日は海についてちょっと日頃考えていることをお話しさせていただけるということで、本当にありがたく思っております。私は一番思い出があるのはですね、子どもの頃ですね。やはり特に小学校、正確に言うのであれば、幼稚園の頃は徳山に一時住んでいたことがありまして、それから小学校の低学年の頃は香川の方に住んでいました。その後周防大島へ戻ったといいますが、両親が周防大島の出身だったものですから、そちらでしばらく暮らして、それから東京へ出て行ったわけですが、ずっと子どもの頃は海に接して育ったんです。とりわけ私、印象に残っているのは周防大島での生活なんですけれども、中学校から東京に出たのですが、夏休みになるとどこにも行かないで、真っ先に周防大島に帰りました。休みが終わるギリギリまで島にいて過ごした。もう両親は関係なくて、帰れなくても、自分だけでも田舎へ帰って、たまたま親戚が網元をやったものですから、船だけはふんだんにあるんですね。まあ当時ですから、まだ船外機も付いてないような、いわゆる伝馬船で、それをマイボートということで借りてですね、近くの無人島に行って、朝スイカとかトマトとか、それから弁当を積み込んで無人島に行くとかでしたね。ほとんどの場合はたった一人で行くのですけれども、それで島で泳いだり、釣りをしたり、木陰で寝転がって本を読んだり、そんなことを体験したものですから、そういう過ごし方ができた子どもの頃から、青年、大学ぐらいまでの頃は本当に幸せだったというふうに思っています。私が大学になった頃あたりが、ある意味では、瀬戸内海は実は最悪の状態だったと思います。高度成長の中で海が汚れるということで、瀬戸内海特別法とかですね、そういう汚染防止のための法律が、その後、昭和45年のいわゆる公害国会と言われる頃から次々と整備されていくわけですが、その頃までは瀬戸内海は、こちらの方は豊後水道がありますが、非常にきれいな状態が保たれていたのですが、周防大島から瀬戸内海の中側の方はものすごく汚れました。それが、法律が整備されて徐々にきれいになって、今ではかなりきれいになってる。しかし、まだ瀬戸内海の内側は結構汚れています。海は非常に穏やかだけれども、水の交換が悪い。そのために汚れたものがなかなか出て行かないということで、瀬戸内海はすばらしい島がいっぱいあって、美しい風景があるのだけれども、水はなかなかきれいにならなかったという具合です。ところで、明治時代にはですね、お雇い外国人とかいろいろ外国から、ヨーロッパとかですね、外国から技術屋とかその専門家が日本を訪れてくるのですけれども、当時はだいたい瀬戸内海を通して、例えば大阪とか東京の方へ入っていくのです。そうすると、瀬戸内海を通った外国人がこぞって「なんてすばらしい景色だろう」ということを航海日誌なんかに書いていますね。私の子どもの頃は、確かにそれを彷彿とさせるものがあったのですが、もう一方で瀬戸内海はけっこう特にこちらの大分方面も含めて台風が来たりするものですから、防災をしっかりせんといかんということで、沿岸をコンクリートで固めていくというよう

なことがどんどん進んだ。しかし、つらつら考えてみると、実は私たちはかなり大切なものを無くしたんじゃないかという感じがするんですね。例えば自然ということで考えてみますと、海というのうは、大変いろんな生命が宿る場所で、特に渚と言われているようなところはですね、魚が卵を産みに来たりして、いろんな小さい魚がそこで育っていくような場所ですから、大変重要な場所ですね。そこが仮に砂浜が無くなるとか、磯が無くなるということになると、その分だけ生物が育つ場所が無くなっていく。もっと言いますと、砂浜というのは、実は大変大きな役割を果たしていて、よく水槽で魚を飼っている人なんかはですね、機械で水を浄化するための浄化槽を動かすわけですけども、あるいは水族館なんか、大きな水族館もですね、海水をどんどん汲み上げてやるわけにはいきませんから、循環させながら、その途中で浄化槽を入れて浄化していくわけですけども、実は一番強力な海の浄化槽が砂浜なんですね。瀬戸内海は特に干満差が大きいですから、例えば 5 メートルとかですね、それくらい干満差が、そうすると細かい砂粒が、ある時は海の中にある、また、ある時は空気にさらされるわけですね。そうすると小さい砂粒の一つ一つに何万、何十万というバクテリアがいっぱいくっついてきて、それが海の汚れをエサにして分解して、海をきれいにしていくということになりますね。ですから、江の島水族館という東京に近いところに水族館がありますが、この前館長の廣崎さんなんかに言わせると、だいたい 1 キロぐらいの渚があると、毎日エネルギーを使って人工的にやったら、数億円ぐらいかかるような浄化能力を備えているということなんです。そういう意味では、いい渚があるということは大変重要なことだということなんです。そういうのを我々は、生活の場所を広げるために、これまで埋め立てたり、削ってきたということなんです。それは実は生物にとって大変なことだただけではなくて、生活ということで考えてみると、まさに先程も歴史的に見て、この瀬戸内海は大変な往来があったというふうに話された方がおられましたけども、恐らくこの国見町も、明治より前は海の交通の要所で、大変栄えた場所じゃないかと思いますが、その証拠はですね、例えば建物とかいろんなところに残っていると思うのですが、考えてみるとですね、海というのは大変な場所で、別段土木工事をやらなくても、天気さえよければ、真っ平らな平面が限りなく続いているという場所なんですね。だから、土木工事の技術があまり十分に発達してなかった頃は、当然のようにみんな海を使って交流をやっておりました。とりわけ瀬戸内海は周りを陸で囲まれていますから、非常に穏やかな日が多いということで、航海技術があまり発達してなかった頃は、恐らく瀬戸内海は大変重要な交流の空間だったと思うのですね。実際私が子どもの頃も、例えば隣の島で祭りがあると、先程神舞の話がありましたけども、神舞だけではなくてですね、普段日常的にも隣の島で祭りがあつたり、何かあるとみんなが船で出かけていく。島同士もそうですし、半島なんかも恐らくそうなんですね。半島ってのは、日本の場合はほとんど相当近代・現代に近くなるまでは道路があまり整備されてない。そういう時は、陸に行くよりも海を行った方が早いということで、みなさん、恐らくこちらの国東半島の方々も、私たちよりも上の世代の人達は、むしろ船で交流するのが当たり前というような時代だったのではないかと思うのですが、考えてみると、その時は別段、今みたいな立派な港があるわけではないし、今みたいなすごい船があるわけでもないけれども、海を自由に使っていた。

それは、何故そういうことができたかという、一番大きいのはやっぱりこれも渚があったということですね。小さい船ですと、砂浜にそのままずっと乗り上げてしまえば、それで行くわけですから、道路が無くて砂浜さえあれば、お互い交流できるということだったと思うのです。現に私も、夏休みの時にいろんな所に行って遊べたのは、そういうことなんですね。今、ちょっと考えられないようなことが、実はおこっているわけですけども、例えば仮に私が船を持っていたとしますね。国見町へ行きたいと思った時、さあ、どう行こうかってことになりますね。砂浜でもあれば、その辺にさっとつけて、とととと上がっていけばいいんですけども、うっかり漁港なんかに入ると、恐らく「どこの船だ。出て行け。」ということになりますね。つまり日本の港はだいたい生産の目的で造られていますから、自分の母港になってるような港以外は基本的には使わせない、ということになるんですね。ですから、特にヨットやボートみたいな遊びの船がそういう生産の重要な場所である漁港とかあるいは一般港なんかでも貨物船が通るようなところに近づくとですね、だいたい「どけどけ」ということになってしまう。ということで考えてみると、海がせっかくあるけれども、ちょうど陸でいうと、自分の家の駐車場からマイカーで出たら、どこにも駐車場が無いというような造り方を、海に関しては、日本がこれまでやってきた。大げさにいうとそんな感じなんですね。ですから、今では船を持っても自由に往来できるかという、そうならないです。そうすると、どういうことになるかという、実際に私の島なんかでもそうですが、隣の目と鼻の先の島に行こうという時に、一旦そこから連絡船でどっか陸側の拠点都市に行って、そこからまた別の連絡船でその島へ行く。それも一日に1本か2本ぐらいしかないというようなことが多くて、すぐ泳いでも行けそうな島に行くのに、船で行こうとすると一日がかりで行くというようなことになったりする。こういう状態で海交流とかですね、お互いに行き来しましょうというようなことは、実はなかなか難しいということなんですね。幸い、今日は、私も徳山からフェリーで来たんですけども、ここにはフェリーが通っていますが、今の船の使い方っていうのは、点と点を結ぶということしかできてない。昔のように砂浜があったり、あるいは港でも自由に出入りできるような港であれば、実はいろんなところから来ようと思えば来れるということになるわけですけども、今はどうもそうになってない。実は港というのが、そういう海の交流を結果として阻むことになった。陸の方は非常に便利になったんですけども、海がそういうことになるものですから、例えば港というものはですね、これをサンズイにチマタと書きますが、かつては港というのは、町が栄える一番大きな拠点だったわけですけども、今はどうでしょうかね。どちらかという、港という何となく人が寄りつかない、大きな港で貨物の港なんかですと、どうもちょっと外国人の船員か何かがかうろうろしていたりして、女性なんか怖くてとても近づけないというようなことになったりして、昔はそういう漁港ですら往来のために使われてましたから、なんとなくみんな出入りしてましたけど、今は漁業以外は使えないということになると、漁業のためには非常に重要な施設ではあるわけですが、地域にとって、そこが賑わいの場とか、人の集まる場所になるかという、そうでもない。これはやっぱりよくよく考えてみると、私もそんなにたくさん回ったわけではないですけど、どうもヨーロッパとかアメリカの港を見ていると、そんなことはないですね。港の側がけっこう賑わいの場所になっています。これは非常に簡単なことで、

そういう港はいろんな船が出入りできるような仕組みになっているということですね。また、産業ですけども、海の近くでは産業が非常に活発に行われる。ところが、瀬戸内海の方は、臨海工業地帯とかですね、工場も随分造られたわけですけども、今となってみると、そういう臨海部が非常に空洞化してしまっている、寂れてしまうというようなことになっておりまして、これも問題になってます。よくよく考えてみると、海を非常に使いづらくなった。海に魅力がなくなった。結果、その海の側での産業もあまり栄えなくなった。ちなみに先程外国人が江戸時代から明治にかけて日本に来た時に、瀬戸内海的美しさを見て、みんなびっくりしたということを申し上げましたけども、恐らくヨーロッパに瀬戸内海のようなところがあったら、今恐らく瀬戸内海は観光のメッカになっております。地中海を見たら、あんなハゲチヨロケの海岸の多いような所ですら、ヨーロッパでは大変なりゾートになっているわけですけども、残念ながら、我が瀬戸内海はですね、観光ということでは今ひとつということになってます。これはちょっと、そろそろ日本も意識を切り替えて、この財産をうまく使って、せめて地域を元気にしようと思うことが必要なんじゃないかというふうに思います。それでですね、実は私は、多摩大学にお世話になっているのですが、本業に近いのは地域交流センターという NPO 団体なんです。その地域交流センターでは、地域と地域を結んで、いろんな仕掛けをやるということ、この 30 年ぐらいやってまして、今、去年あたりから、一番力を入れ始めてるのが海交流なんです。これが実は私の思いも若干はありますけども、もっと海を使って交流するようなことを考えたい。これは先程から言ってきましたが、私は海が大好きです。私自身もっと海を使って遊びたいという下心もないわけではないですが、先程も来賓のご挨拶の中にもありましたように、海を使った交流というのは、やっぱりいろいろな意味で魅力があるのではないかということですね。これからお話しするのは、去年からやり始めた、来年、再来年ぐらいまでやって、ちょっと世の中に問題提起しようと思っておりますが、海のまち交流は去年からやり始めてるのですけれども、港を持ってるまち同士がお互いに、例えばヨットとかモーターボートとか、漁業関係の方が協力していただけるところでは、漁船に子供を乗せて、お互いに交流しましょうということなんです。海と山との交流は、山の子供を海に連れ出して、海を体験させてあげましょう。いずれも後でお話ししますが、大変子供たちには評判がいいですね。例えば、昔は私たちが子供の頃は、夏休みが近くなると、臨海学校なんてのがありましたけど、今、海は危険だから臨海学校なんかやらない、やるんだったら学校のプールで泳がせると言い出してやらなくなりましたが、これも実は大問題だと思いますが、それではいけないと思った人たちが、そういう海交流をやるということ、今、始めております。これは実は一つの例なんです、このゴムボート 10 人乗りの手漕ぎのゴムボートなんです、こういうのを使って海で遊ぶというようなことに積極的なんです。これは高校生ぐらいから大学生ぐらいの若い連中ですけども、本当に嬉しそうに漕いでですね、だいたいこの連中はボート部でも何でもなくて、初めてこんなことをやりましたっていう連中なんですけども、やってみると非常に楽しい。ちなみにこれ、E ボートと言っておりますけども、これは地域交流センターが開発して造ってもらった船なんです。なんかありそうな船ですけども、実はどこも造ってなかったんです。カヌーとかヨットとかモーターボートはあるんですが、こうい

う原始的な手で漕いでですね、前へ進むボートで 10 人くらい乗れるものってのは意外に造ってないですね。なぜ私たちがこれを造ったかという、例えばカヌーってのは非常に完全ないい商品ですけども、個人一人が乗るとか、せいぜい二人が乗るような船ですから、子供たちを、例えば 50 人を遊ばせようと思って、子供たちが一人でそういう船に乗って遊び始めたら、とても危険で面倒見てられない。100 人ぐらいの大人がついて、付きっきりでやらないと 50 人の子供は遊ばせられない。こういうボートですと、10 人乗りのボートに子供を乗せて 5 回海を回ると、50 人が遊んだってなるんですね。そういう船を使って海交流をやりましょうということです。では海交流だどこがどういいんだろうかという、先程言いましたように、当然交流の手段としては非常にいい手段だということになるのですが、例えば関東とか東海地域では、今、いつ大地震が起こっても不思議ではないということになってますね。そういうところは、実は阪神淡路でも経験してるわけですけども、実はそういう大地震が起こったりすると、陸の方は道路がめちゃくちゃになったり、鉄道もめちゃくちゃになったり、だけど海は地震があったからめちゃくちゃになったまんまの状態になるということはありません。まあ津波が来るというようなことも一方ではありますけれども、そういうのが治まってしまえば、先程言ったように平らな平面が、船という大量輸送手段が使えるということになると、実は安全・安心ということを考えて時にも、海を積極的に使えるような資金があるということも、実は非常に重要ですよということになるんですね。私、1990 年頃に相模湾で、相模湾をどういう風にこれから考えていこうかというようなことでイベントをやったことがあります。外国から非常に有名な海岸をデザインする計画をする専門家に来てもらって、相模湾を見てもらって、イメージプランを作っていただいたことがあるんですが、彼らが言うことはですね、私は非常にある意味ではビックリしたんですけども、どういうことかと言いますと、ヨーロッパとかアメリカってのは、今素晴らしいリゾートがあったりしますけども、彼らは相模湾を見て、どういう言い方をしたかという「こんな都市に近くて、こんな自然が残っていて、しかも犯罪がない」と。だいたい欧米ですと、都市に近いと犯罪の問題を気にしなければいけない。それで、ヨーロッパとかアメリカの場合は、都市からはるかに離れたところが自然のリゾートとなってる場合が多いんです。ところが、相模湾、この瀬戸内海もそうですけども、すぐ近くまで町があって、そのちょっと先行くと素晴らしい渚があったり、磯があったりして、そこで遊べるということに原則的にはなってるわけですから、計画する立場から見ると、素晴らしい国際リゾートができますね、というような話になるんですね。我々は普段、そんなことは夢にも思わない暮らしをしてるわけですけど、実はそれこそ金・銀財宝が詰まった宝箱の上に座っていて、そのおしりの下の宝物には気が付いてないというような生活をしてるのではないかというような気がします。ですから、そういうことを含めて考えてみると、海ってのはもうちょっと見直して、海をうまく使いこなせないかということになりますね。それで考えたのが実は「グルッと海交流」。グルッと海交流って言うとなんかへんてこりんな名前ですけども、どういうことかという、港と港同士で交流しようという提案してやり始めています。去年は 18 ヶ所でやりました。今年は恐らく 50 ヶ所ぐらい、来年は 100 ヶ所ぐらいでやろうと思っています。当然、港と港を結びますから、その倍以上の所、地域が参加するということになります。まあ

100ヶ所もやると日本の主だった地域はだいたい繋がる。地図帳にそういうところをバースと印つけると、ほぼ日本中で海交流が行われていたということになる。これはやはりちょっとした問題提起としてはいいのではないかと思います。去年はどんなことをやったかという、こういう交流をやりながら、例えば船からどんどん写真を撮っていく。そうすると海から見る日本ってことになるんですが、概ね、あんまり写真にたえないような海岸が残念ながら日本の場合は多い。でも決してそういうところだけではなくて、素晴らしい海岸を持ってる地域もいっぱいあるということで、普段陸からは、例えば三陸海岸なんかでやって、みんな改めて地元の人ビックリしてるんですが、普段車で崖の上を走っていると全然分からないですが、逆に海側から見ると、素晴らしいリアス式海岸が目当たりに見えるわけで、やっぱり素晴らしい景色だということになるわけですね。そういうので写真コンテストをやる。そうするとうちの町はこんな素晴らしい海岸がありますよ、ということをもたお互いに知らせ合うことになります。また、体験作文コンテストは、乗った子供たちに感想文を書いてくださいという、みんな喜んで書いてくれて、ぜひこの次も乗りたいとか、そんなことです。一番下の海交流フラッグ集は、ヨット・ボートで、特にヨットなんかやってる方はピンとくるかも分かりませんが、船というのはもともと昔は船同士の通信に手旗信号なんかやってるんですね。つまり、旗を使って交信をやってるんですね。船と旗は、実は非常に縁が深い。漁業で言えば、大漁旗もそうですね。そういう船同士の旗をいろいろ作って交流しようというようなことなんかも考えてます。私たちが流儀はNPOですから、あまりそんな体裁を繕う必要ないんで、とにかく5人でも6人でもやろうといったところはやりましょう。別に100人、200人参加しなくてもぜひやろうという人が5人以上集まったらもうやりましょうということをやっています。こんな感じで去年は18ヶ所で、実際にやったのは、例えば東京湾の場合はあまり東京湾を縦横に走るということができないものですから、お台場という東京湾の、東京都の一番海で言うと中心部に近いところで、この10人乗りの手漕ぎボートを使って、いろんなところから集まった人達が海で遊ぶというような大会をやりました。これは新潟県の柏崎ですね。出雲崎町というお隣同士の町がヨットによって、子供たちを交流させましょうというようなことをやって、これなんか地域がちゃんと準備をして対応すれば、これからは子供たちの総合学習とか体験学習とか、非常に学校側でも力を入れたい、だけど非常に海というのは危険だということがありますけども、逆にこれはイギリスなんかは海で囲まれてるから、海が危険だから海に近寄るなということではなくて、海に囲まれてるからどんな時でも海でうろたえないようなことを子供のうちにちゃんとしつけておかなければいけないということで、実は着衣水泳という言葉があるんですね。服を着たまま泳ぐ。つまり普段、港を歩いてポチャンと落ちた。そういう時は当然海パンなんかはいて落ちるわけないですから、こういう格好で落ちこちちゃうんですね。そうすると、普通ちゃんと慣れてないと、それだけで溺れちゃう。服を着てもちゃんと溺れないためのしつけ、訓練を子供のうちにやるってのは、イギリス流のやり方ですね。本当は日本なんかも子供のうちに、実は私、子供の頃なんかはよくそれをガキ大将にやられるわけなんですね。小さい子供の時ですね。年上の連中から海に突き落とされて、溺れそうになって、その時助けてあげて溺れなくてすむってということで、そういうことを通じて、

海に落ちこちても平気になるわけですけども、今はそれが危険だからってことで遠ざけるというやり方です。これは一見安全なようだけでも、いざというときには対処できないということで、非常にひ弱い子供になってしまった。そういうのを、こういうことを通じてもうちょっと考え直そうということも狙える向きがあるんですね。これちょっと見えにくいですけども、感想文を書かせると、だいたい子供たちは大喜びで楽しかったということになっているわけです。これはですね、対岸の愛媛県の三瓶町、ここは町長さんが非常に熱心ですね。海交流をやりたいということで、実は三崎町から三瓶町宇和島と、ヨットで航海しながら子供たちが交流したり、大人達が交流したりってことを去年、夏やったんですね。で、こんな感じで町長さんと一緒に子供たちもヨットに乗ってロープを引っ張って、帆を揚げたりいるんなことをやって楽しむというようなことをやっています。こういうやり方をきちっとやるというのは、これ見ていただければ分かりますけど、子供たちみんなライフジャケットを着けてますね。普段そういうことをきちっとできるような仕組みがないと、ライフジャケットなんかつけなくてもやめたら、子供が落っこって大変だっていうことになったりするわけですが、海で遊ぶということは同時に、こういうことをちゃんとやるというようなこともですね、考えてやるような習慣をつけると非常にうまく安全に、しかも子供たちも思いっきり海で遊べるということになるんですね。これは、半田市という愛知県の町ですけども、内陸の都市の人達が半田市という海の側の都市に来て、それで海で交流しましょうということで、犬山市長も参加してですね、若い音楽家も参加して一緒に交流をやる。こんな風にガッと海を回って、こういうのはやっぱり内陸の人達にはめったに体験できない。で、私は、半田市の市長さんなんかにも申し上げているんですが、「石田さん、これ、半田市と仲良くすると犬山市は山の中であるけれども、犬山市に海が持てますよ」ということで、例えば犬山が船を買って、半田市に置いてもらうといつでも子供たちを連れて乗せたいと思ったら、そこに行けば使えるということになりますから内陸のまちだって海が持てるということになるんです。今、私たちがもう一つ提案してるのは、「海の駅」ってのをやろうということ提案したんです。あの、皆さん、陸の方では最近、道の駅っていうのが、国道沿いに素晴らしい施設がいっぱいできてますけども、まあ、あれも一つの、実は地域交流センターで1990年頃からその立ち上げをお手伝いした事業の一つなんですけども、今度は海です。海で交流するための拠点を作ろうということで、実はもう一部分で始めています。先程ちょっと紹介しました愛媛県の中島町というところはですね、完全な離島で、橋も架かってない島ですけども、島ごとに海の駅を作りたいということを町長さんと島の人達が考え進めてるんです。どうしてそういうことを考えたかという、実は島の出身者で、都会へ出た人が、その、たまには故郷へ帰りたいということで帰ってくる。その時に親戚がいれば親戚のお世話になることもあるけども、2代目、3代目ぐらいになってからだと、親戚といってもそう簡単に、気安く泊めてもらうにはちょっと気兼ねがあるというような人が、お墓参りに帰ってきた時に、小さい島ですから宿屋もない、そんなところでどうしようかということを考えて、島の駅を作って、海の駅を作って、そういうところで泊まれるようにしたらどうだということで、ここは島が、いろんな特徴があるから、それぞれ何とかの里というような名前をつけた海の駅を作ろうということになっております。もう一つは、中島の本島です

けども、ここにはやはり連絡船の待合室のところ無人販売コーナーをおいて、これも先程の海の駅の一環として、ここをみかんの里っていうことでやってるんですが、たったこれだけの無人販売場なんですけども、年間の売り上げが 2000 万ですね。誰もいなくて 2000 万売り上げるんですから、これはものすごい人件費をかけないで 2000 万売り上げた。今、白いコートを着た人が買っていますけれども、何を買っているかという、お墓参りのお花を置いてあるんですね。だから都会からもうあんまり身寄りもないけど、墓だけはあるといことでお墓参りに帰った人は、ここの無人販売機を使えば、ちゃんとお墓の花とか線香まで買って、ちゃんと墓参りができますというようなことを、これは過疎になった島ですと、かなり大切なことですね。もう身寄りがいなくなったという人はいっぱい、逆に都会の方には、そういう方がいっぱいいらっしゃる。そういう人達に、たまには帰っていらっしゃいよというためには、せめてこういう受け入れの場所を作って、それも人が少ないわけですから、人がいなくても受け入れられるような工夫をするというようなことをやります。これ、豊町の方は、文字通りかなり豊かな海の駅を作ってます。これはあんまり立派すぎて、こういうの参考にしちゃうと、「みんな、ちょっとこんなのはできないよ」と言うんで、尻込みしちゃうんじゃないかというぐらい、これはホテルなんですね。40 人ぐらい泊まれるプチホテルです。なかにはちゃんとちょっとしたリゾートホテル並みのいい洋室のツインの部屋がありまして、40 人ぐらい泊まれるんですけども、ここに、私は地域交流センターの女性のスタッフを連れて行って、ちょっとフォーラムなんかやった時に、その女性スタッフが言ったことが非常に印象に残ってる。彼女は何を言ったかという「あ、ここだったら友達と一緒に今度遊びに来よう」と言ったんですね。彼女が言うイメージはだいたい汚い民宿が多いと、その民宿も下手をすると、その土木工場の飯場の代わりに使われているような民宿が多いんです。夜、鍵もかからないお風呂に入っていると、いきなりふんどし一丁のおっさんが入ってきたりとかですね。だから瀬戸内海には行きたいけどイヤだ、泊まる場所がない、というのが若い女性の印象なんですね。だから彼女たちは太平洋の島まで高いお金を払って行く。せっかく目の前にいい島があるのに、そこには泊まってくれないということになってる。こういうのがあったら、それだけで、あっ、これならいいということになるんですね。イギリスにテムズ川という川がありますけども、テムズ川を中心に、川と運河を使って 300 キロ以上のルートを作って、あのイギリス、島国ですけども、その中に、要するに外は大西洋の荒波ですから、あんまり出て観光するってのは小さい船はあんまり適切ではない。彼らは中をやる。そうすると、イギリスの場合は川伝いにどんどん行くと、途中にいいゴルフ場があったり、あるいは途中に昔の王族が使ったようなお城があったり、貴族の館があったり、そういうところでちょっと止めて、そのお城を見学したり、いろんなことをやりながら一週間ぐらいその船でずうっと回るといようなことをやって、さしずめ瀬戸内海なんかは、本当はやるうと思えば、それぐらいの歴史的ないろんな建物とか文化財というのはいっぱいあちこちゴロゴロしてるということですから、多分イギリス人がこんな海を持っていたら、もうとっくの昔にこんな船で回り歩いていたろうという風に思いますけども、実際にやってみると、非常に楽しいということなんで、これもこの時はたまたまこのエリア内でやったからうまくいくんですけども、恐らく瀬戸内海を股にかけて

やろうとすると、「じゃあこの船、どこで止めたらいいの」っていうところあたりから、いろいろ考えないとうまくいかない。あるいは泊まろうと思ったら、なかなかいい宿泊場所がないとか、いろんなことが、いっぱい問題が出てくるわけですが、これをやってみると、そういうことが見えてくるんですね。やらないうちは、こんなのやらないと思ってるから、誰もそういう不便さとかせっかくいい材料を生かすというようなことについて、どんな問題があるのかということもよく分からないということで、私達はこういうのを社会実験と言うんですけど、今までなかったことを何とかしようという時はとにかくやってみる、やってみるとどこが問題なのかが分かるし、どうしたらいいかということも見えてくる。そういう中で建設的な議論を関係者がみんなでしながら、じゃあ海の駅をもうちょっとみんなで作って行って、お互いに海の駅同士は自由に交流できるようにしようよ。だからフェリーができるってのも非常に重要ですけども、それ以外にいろんな船が往来できるような仕組みを作っていこうとなんていうことになると、もっと瀬戸内海いろんな使い方ができるようになるということなんです。こういうのは、みんなやってみるまでは分からないですね。やってみるといかに楽しいかということも分かるし、いかに使い勝手が悪いかということも分かってくる。だから、とにかく不完全でもいいから、やる気のある人が何人か集まったらやってみるというようなことをやっていると、海っていうのは考えてみると、日本の近代化 100 年あまりをかけて、自由に使えなくなってきたという歴史がありますから、逆にこれから 100 年ぐらいかけるつもりで、かつての海が非常に交流の場所であったというようなものをどんどん作っていかないといけない。町同士が情報をお互いに交換し合って、せめてその連絡船の待合場みたいな海の駅にはそういう情報を置いておく、そうするとこれから船で何とか島に行ったら、その島では名物タコ飯があるとか、そういうのがちゃんと分かるということになると、旅の楽しみもまた増えてくるでしょうし、だからこういう風な手段を作ることと、手段を使ってどんな楽しみができるかということ、情報をみんなが共有するということをやると、また海で交流するという楽しみがまた一段と高まってくるだろうと思うんですね。ということで、地域交流センターというところでの私達は、海を具体的に、海を使って海で遊ぶとか、海を使って交流するというのをやろう、それもあまり大げさに考えないで、とにかく何人かの有志が、ああ俺はヨットを持ってるからそのヨットを提供するよ、と。で、ある町長さんが、いやじゃあ、うちの港を使っていいよ、と。そういう人が何人か集まればそこでやってしまおうというようなことを去年は 18ヶ所でやったんですが、そういう、この指とまわってという感じで、そういう気のあるところがどんどん参加して行ってやってくると、今までは、ここはうまく機能したけども、また別なところでいうと別な問題が起きてくるとかですね。そういうこともどんどん分かってくる。そうすると日本の港とか日本の海の使い方を具体的にどういう風に変えたらもっと普通の人々が海で楽しく過ごせるかということが、だんだん分かってくると思うんですね。で、それから先は市民ができる仕事もあれば、行政でなくてはできない仕事もあれば、あるいは民間がビジネスでやった方がずっといいものができるというものも多分あると思うんですね。だからどんどんそういうことをやればいい。で、一番基本になるのは、とにかくやってみようじゃないかという人が何人か集まって、そういう相談をして、できることからやっていくことです。今、地球環境とかそういうことは非常に問題

になってきてますから、ドイツとかフランスとかオーストリアとかヨーロッパの国々は路面電車とかバスとか、そういう公共交通にもものすごく力を入れ始めたのですね。相当な田舎でも6、7分間隔ぐらいで電車が動いていて、その電車は丸一日24時間、いろんな電車乗り放題で300~500円というような都市が今いっぱいできてます。そうすると、そういうところではですね、いつでもみんな乗れると、安く乗れるということになりますから、だいたい走ってる電車の中に乗ってみると、座席はほとんど埋まってる。平日の昼間、日本だったら2、3人ぐらいしか乗らないとか、たまには空でバスが走ってるというようなことが地方では当たり前のようにありますけども、ヨーロッパなんかですと、相当な田舎に近いところでも、そういう公共交通、結構乗ってるんですね。それで印象的だったのは、役場に行って、でも赤字でしょうということを言うと、恐らく日本だったら、いやぁすみませんということになるんですが、彼らは何を言うかという、だから行政がやるんだ。というんですね。つまり赤字が出るのは民間にやってもらうわけにはいかん、だから公共が関与してやるんだ。じゃあ赤字はどうするんですかと言ったら、だから税金を使うんだと言って、これは優先順位の問題だと。つまり、その漁港に、お金を、漁港を造るタイプの事業だけにお金をつぎ込むのか、それとももっと港全体を使い勝手をよくするためにお金をつぎ込むのか、あるいは港で降りた後、自由に移動できるような公共交通を含めて整備するところに税金を使うのか、今高齢化が進んでるとか、環境問題が厳しいとかいうことを考えてみると、公共交通を優先するってのはかなり優先度が高いのだと。だからそこに税金を使うのだというようなことを言うんですね。つまり、その公共投資ってのは、今道路なんかも含めて、いろいろ無駄だとか、考え直せとかいう話が、議論がいっぱいあるんですが、日本の不幸なところは、ただ単純にそれが採算性が合うかどうかだけを考えてやるんですが、その前に、これは何の役に立ってるのかという議論があんまりないですね。特に地方に住んでおられる方は道路の問題に関しては言いたいこといっぱいあると思いますけども、その税金を使うという時の優先順位みたいなものを、地域はもっとみんな考えて、こういうことにはもっと積極的に税金を使うべきだとか、こういうことにはその代わり税金を使うべきではないとかいう議論を含めて、この地域をどういうふうに使っていくのかあるいは海をどういうふうに使っていくのかということ、そろそろ考える時代に来たんじゃないかと思うんですね。だから単純に赤字だから止めるとか、黒字だからどんどんやれという話ではなくて、赤字でもやらなければいけないものはやる。あるいは黒字でも、こんなのはもう公共でやる必要がないから、民間に渡すのは渡してしまうということも含めて、私達はその地域をどうするかってのを考える時代が来ているのではないのでしょうか。今日はこの後、ぜひパネリストの方々にそういうことも含めて活発に議論していただければと思います。

5. パネルディスカッション 「周防灘を介した交流と観光を考える」

コーディネーター	大分大学工学部教授 佐藤誠治氏
パネラー	湊音寮館長 和田木乃実氏(国見町) 昭和の町仕掛け人 金谷俊樹氏(豊後高田市) JTB 徳山支店長 兒子敏明氏(徳山市) ハゼの実口ウ復活委員会 宮坂和枝氏(田布施町) 祝島ネット21事務局長 國弘秀人氏(上関町)
アドバイザー	多摩大学総合研究所 客員主任研究員 米村洋一氏

(佐藤) それでは、早速パネルディスカッションを始めさせていただきます。今日は5人のパネリストの方をお招きしておりますけれど、大分から2人、和田さんと金谷さん、それから山口から國弘さんと宮坂さん、そして兒子さんは徳山でお仕事されておりますけれども、どちらかと言いますと、外側からと言いますか、あるいはその両地域を結ぶような、そういうふうなお仕事をされておりますので、そういう観点からのご意見も伺えるのではないかなと思います。なお、先程基調講演いただきました米村先生にはアドバイザーとしてご発言をお願いしております。周防灘を介した交流と観光を考えるということでございまして、この「介する」という言葉、これはまあ、仲介すると言いますか、これをもって「繋ぐ」ということになるんだと思いますけども、ただ、先程のご講演にもございましたけれども、確かに海をもって繋ぐ、というのは一つのやり方ではありますけれども、まあ見方をかえますと、これはやはり一つの障害、バリアになってるんですね、それをいかに繋ぐか、両地域を繋ぐ、その役割を持たせていくのかということが大事であろうと思います。そういう海のバリアというのを克服して、交流に結びつける。そのためにまちづくり、あるいは地域おこしをやっていかなければいけない、というふうに思うわけで、なぜ、そこまでして交流しなければならないのかということもやはり私達は考えておかなければいけないわけですが、人間というのはもともと、字を見ますと、人の間と書きます。人の間ということは結局、人と人が繋がっていくというのが人間の基本的な性格であるというふうに考えていいわけで、それから非常に卑近な問題を引き合いに出しますと、人口減少社会の中で交流することによって人口減少を克服すると、よくあの例えに言われるわけですが、湯布院という町がございまして。湯布院は人口が1万人程度、だけど年間の入りこみ客が360万人、そうすると常時、町内には2万人の人口がいるということになるわけで、そういう交流の効果があるわけでございまして。国東半島は人口が極めて減少している、そして高齢化が進んでいる地域でございまして。交流を通じて地域を活性化していくということの非常に大きな課題をもっているところでございまして。海を介して繋がるということが非常に大事である。先程あの神舞の話もございました。これが歴史的にみたら、海を介して繋がる象徴的な出来事であったし、イベントであったし、神事であったというふうにいえるわけでございまして。国の方でも先程、国土交通省の課長さんの話もございましたけれども、県際間交流というか、県と県を繋ぐような交流に力を入れている。21世紀の国土のグランドデザ

インを見ますと西瀬戸地域ですね、西瀬戸地域の交流についてはかなり力を入れて記述しております。中国地方と九州、それから九州と四国、四国と中国を結ぶようなこの三角形の地域を、交流を続けて活性化していくということを具体的に書いてあるわけがございます。そういうことで、皆様方には今日は地域の活動を通じて、そしてそれをこういかに県際間交流、周南地域と大分県北、国東半島地域とを、結んでいくのかと、まあそういうふうな観点からご発言をいただきたいというふうに思っております。

(和田) 涛音寮をしております。地元国見町の伊美で生まれまして、伊美で育ち、そして現在住んでいるという土着民みたいな和田木乃実です。どうぞよろしく願いいたします。今日はみんなんかんのライトがとてもきれいなので、恐らくこの帯のジャケットを着たら映えるんじゃないかなあ、という思いで着てまいりました。超ど派手になってしまいましたが、この中で華を添えていけたらいいかなと思っております。平成9年に、涛音寮という名前でオープンしましたが、昔は造り酒屋をしていた自分の生家になります。造り酒屋をしていた当時のひいおじいさんがその3階建てを建てたんですけれども、その前の伝兵衛じいさんという方はなんと回船問屋みたいなことをしていたという、古い古文書から最近地元の先生が読んでくださいました。小豆島から素麺があがってとか、中津から炭があがってとか、佐賀関から瓦があがって、慈恩寺の屋根替えをしたとか、何々をおろすとか、いろんなことが書いてありましてとてもおもしろいなあと思ったんですけれども、すぐこの下手になります海の方に旧古町って言いますが、町だったわけなんですけど、今は面影はあまりなくて、「こういう大きな家を移築したんですか」と観光客の方言われるんですけれども、移築したのではないんで、あそこが街だったわけなんですけど、今では面影もあまりなくなって、その3階建ての家をギャラリーみたいにして、中で私が屏風とか掛軸とか、創った作品を展示したり、国東半島の方々の作品を展示したりしております。だんだんと今、国東半島観光協議会なるものも発足しまして、なんとか国東半島をいろんなところに売り出そうという面々が、月1回とか、2月に1回とかの話し合いをしております。でも、あの横の繋がりがっているのがなかなか取れないこともありまして、これだけ世界遺産にしようといわれている国東半島がなかなか手をつなげた宣伝がスムーズにできてないはがゆい現状をひしひしと感じている今日この頃であります。国見にもたくさんギャラリーができてきましたけれども、これからはみんな手を繋いで、国見に限らず、隣にいらっしゃる、高田の昭和の町の金谷さんや、また国東半島のお寺や新しくできた温泉や施設等を皆さんで手をつないで、いろんな国東の観光をもっと宣伝できたらいいなあと思っております。

(金谷) 私ども豊後高田の商店街では今、昭和の町づくりというのを進めております。まずはその昭和の町と位置づけた商店街が昔、どうだったのか、そして、今どうなっているのか、これからまずお話をいたします。昔といっても、わずか数年前、1年何ヶ月か前のことでございますけれども、私どもの豊後高田の商店街、今日、あの大分県の方はご存知の方もおられるかと思っておりますけれども、商店街なんか歩いても、人間見るよりも犬とか

猫見る方が多いと地元の間人からも見放された本当に寂れきった商店街でございました。豊後高田のまち、人口1万7千から8千ぐらいですから、当然今の状況の中で商店街がそんなに寂れてるというのはそんなにおかしいことでもありません。そんな状況でしたが、今、どうなってるか、例えば、明後日のことで申し上げますと日曜日ですね、熊本と宮崎から観光バスが3台入ります。それからあとは長崎県から確か視察の農業女性の方々が視察にお見えいただきます。それからあとは天下のテレビ朝日さんですね、あの小宮悦子さんがやってる「スーパー」チャンネルが明後日取材にお見えいただけるということで死にかけてた商店街がとんでもないことになっております。何でそんなことをやったのかと聞かれますと、こんな大きな成果を望んでたわけではございません。死にかけてた商店街なんとかちょっとでも元気づけたい、まずはその思いがございました。よく商店街を元気にしようとした時に何とか東京に追いつこう、福岡に追いつこう、山口県であれば徳山市・山口市に追いつこう、あるいは大分県であれば大分市に追いつこう、新しい時代の波になんとか乗ろうということで商店街どこもがんばっていると思いますが、うちのまち、どんなにがんばっても東京にも福岡にも絶対に追いつけません。だからちょっと後ろを振り返ってみました。そしたら何があったか、うちのまち、400年におよぶ商店街の歴史がございました。その商店街の歴史と伝統の中から、自らのまちの個性を見つけ出したい。ここにしかない個性を見つけ出せば、もしかしたら東京にも福岡にも逆回りして追いつけるんじゃないか、逆回りして追い越せるんじゃないか、そんな思いがございました。江戸時代のまちはどうか、明治・大正のまちはどうか、いろんな議論を10年ぐらいかけました。その上で昭和30年代というテーマが浮かび上がってきました。現在、まあその昭和30年代のテーマをもとに、商店街を昭和の町に徐々に徐々に造っているわけでございます。最後に申し上げたいのは、今日のテーマである県際間、こういったことを語るのもこれももちろん大事なんですけども、その地域の中にある、ちっちゃなちっちゃな地域の一つひとつが、どれだけ、輝けるか、例えば私どもみたいなちっちゃな死にかけてた商店街が、昭和の町というテーマを掲げるだけで、輝きをいづらか取り戻してくる、ちっちゃな地域が輝きをとりもどす中で、それが連携していく中で、県際間の問題あるいは地域連携の問題とかがあるんじゃないかなと、こんなことを考えながら、昭和の町づくりをやっております。

(佐藤) はい、どうもありがとうございました。一つひとつが輝けるという、恐らくこれは商店街の中の一つひとつの店ということだというふうに思いますし、それから先程、和田さんの方からですね、今、涛音寮を再生させて、地域の持っている資源を、もう一回磨いて輝くものにしたというふうなことがございました。金谷さん、ちょっと発言時間が短かったんですけど、例えば一つ一つ輝くためにどんなことをやったのかということ、よくテレビなんかでも報道ありますけども、農業倉庫だとか、あるいは一つのお店を再生するというよりもむしろ磨いていくということだったんじゃないかなという感じがするんですが、ちょっとその辺は具体的にどんなことをおやりになったのか。

(金谷)さっき申し上げた昭和の町づくり、どんなふうに進めてるのか、4つのキーワードがございます。1つは昭和の建築再生です。商店街の通り、総延長 500メートルの中に100軒ほどの建物がございしますが、この建物を1年に10軒ずつ昭和の面影を取り戻しております。これが1つ目。2つ目は昭和の歴史再生ということで、一店一宝運動というのをやっております。1つの店に1つのお宝、博物館に飾ればゴミなんだけれども、例えばうちのまちのお肉屋さん、お魚屋さん、その店にとっては、じいちゃん、父ちゃん、ばあちゃん、母ちゃんから受け継いだかけがえのない誇りなんだといったようなものを、その店に伝わるお道具を、お宝として展示しております。それから3つ目、昭和の商品再生、例えば私どものまちにお肉さんがございます。昭和20年代から40年、50年と豊後高田で愛され続けてきたコロッケ、手づくりのコロッケです。これを今、昭和の町で売っておりますと、今一日3000個売れたりします。こんな昭和の一店一品運動、1つの店に1つの品ということで一店一品運動を展開しております。以上3つはみんな物でございます。建物もお宝も一品もみんな物でございます。最後に4つ目、私達一番大事なのは昭和の商人の再生です。豊後高田の商店街には短いところで2代目、長いところで7代目という長い歴史を守り継いだ商店がございます。その商店を守り継ぐ商人、平成の商人ではない昭和の商人を何とか取り戻していきたい、これができてはじめて昭和の町は完成するものと考えております。

(宮坂)私は平成12年の12月2日の土曜日、それから3日の日曜日、国東半島に來させていただきました。その時の印象は、ここへ来たのは初めてなんですけれども、浦島太郎といいますか、ここは竜宮城だっていう感想を持ちました。いろんなところを見せていただいて、和田乙姫様などにも良くしていただきまして、お土産もたくさん持って帰りました。そしてそれを開けなければよかったんですけど、開けてしまいましたのでこんなおばあさんになってしまいましたけど、またこの度お呼びいただきまして大変ありがとうございました。私の活動しています田布施町ってのはここ竹田津からフェリーで徳山に着いて約1時間ぐらい行ったところです。そして、さらに1時間ぐらい行きますと、國弘さんの祝島があるんです。田舎なんですけれども、田布施町というと、兄弟宰相、岸信介、佐藤栄作が出ましたので、全国区じゃないかと思うんですけど、名前はご存知かもしれませんね、そこで田舎暮らしを楽しくやろうと世代や地域を越えて集まった遊び心のグループ「木採村(きどりむら)」こういう字を書くんです。「木」が好きな人達っていうか、自然が好きな人達が集まって、作った村ですけど、私は15年間ぐらいこのグループに入っていて、仕事のかたわら、いろんな楽しい活動をしてきました。木採村というのは地図の上にはない、架空の村で、気取った気持で自然を満喫しようと名付けられました。その遊び心の団体が原点となって有志が名のりをあげて、仲間を募り、行政の指導を受けないで活動をしています。以前NHKの大河ドラマで「毛利元就」というがありました。江戸時代、元就の毛利藩の推し進めた防長四白政策、米、紙、塩、ロウがあるんですが、ロウですが、米は継続して作られています。紙は徳山ですと徳路とか、須金という地域で復活してるようです。それから塩は防府で再現されました、今までにロウだけが復活されていなかったの

で、それを自分達の力で復活させてみようといった声が上がりました。そのきっかけは昨年暮れに94歳で亡くなられた私達の名誉会員であるタガワケンジさんという人がいるんですけれども、その人が6年前に田布施町の宿井には樹齢240年のハゼの巨木があり、町の文化財に指定されているが、あの木からとれるハゼの実でろうそくをつくることはできまいか、ということがきっかけだったと聞いております。今、すでにロウソクを作りましたし、ロウケツ染めですとか、いろんなロウに関するもので子供たちに体験学習をさせたり、イベントが随分たくさんあるんですね。そういう活動をしております。ちなみに私が付けてるこれ、これはハゼの実です。その240年の巨木、その巨木が残ったというのは、その巨木の下にほこらがあって、ハゼの木は嫌われて切られてしまったのが多いんですけれども、その木を切るとほこらが壊れるということで、残されてきました。そのハゼの実です。そんなことがきっかけで活動しております。

(佐藤) どうもありがとうございました。毛利藩がやっていたかつて4つの政策をその一番大事なキーポイントになりそうなロウをですね、再生されたということですけど、このパンフレットの中に写真がございまして、非常に伝統的なロウの搾り方をされてるということですけども、その時、技術を再生すると言いますか、その時のどういうふうなことが一番工夫がいましたでしょうか。要するに、木で組んでですね、相当大仕掛けですよ。

(宮坂) ロウについては私達の地方では作るには作っていたようなんですけども、資料がない、マニュアルもわからない、というところから始めて、四国のうちこですとか、いろんなところを見てまわりました。それからロウを搾るための機械は、ちょっと難しかったので、これは菜種油をしぼる機械を参考にして、私達の木採村っていうのは、木の好きな人が多いですから、大工さんのお仕事をできる人いますから、その人達が組みたててくれました。これは搾るのはテコの原理というか、くさびを入れて、重しをかけて、両方から除夜の鐘をつくような要領で呼吸をあわせてつきますと、グイグイくさびが締めつけられて、ロウが出てくる仕掛けになっています。それから作ったロウはまずこういうものを木からとる。これが大変なんですけれども、これを集めたものをだいがらで打ち砕く、それからそれをふるいにかけて、果肉と種を分ける、それを蒸す、そして今の搾り機にかける、というふうな作業があります。それから機械化というか、ある程度、合理化できると思うんですけども、それをしたら復活にならないというか、当時のことと同じようにやって当時を偲ぶというかそれも、あの、会の一つの教義みたいになっていますからあまり効率のよい仕事はできていないけれども、そのかわりに純粋なよいものができていると業者の方からも墨付きをいただいています。

(國弘) 祝島の國弘です。今日は、今回のシンポジウムのプログラムを見せていただいて最初、びっくりしたのは、神舞がこれだけ大きく取り上げられているのは、びっくりしたんですけども、海を介した交流のさきがけとして取り上げられていて、大変光栄なんです。祝島と国見町、チャーター船で来るとだいたい1時間ぐらいなんですね。ただ、今回私一

人で来ました。チャーターで来ると非常に高くつきますので、いったん本土に渡って、グルッと大まわりをして徳山からフェリーでやってきましたけれども、行こうと思えば本当に近いところですよ。先にちょっとせっかくですので、神舞の紹介をさせていただければと思ってちょっと持ってきましたので、少し時間をください。神舞の由来等につきましては、プログラムのページに載っておりますので、それを読んでいただければ、だいたい由来は分かると思いますので、その実際にどういうふうなことをやっているかということをお話したいと思います。今から千百十余年前、仁和二年と書かれてますけども、実際にこれ何年かという西暦 886 年になります。平安時代、有名な人ですと、菅原道真公が太宰府に左遷される、だいたい 15 年ぐらい前のお話ですね。こちらの伊美の方が山城国つまり京都から岩清水八幡宮の分霊をもらって帰る途中しけにあって、祝島に漂着したと。漂着した場所が今、地図が出てますけど、三浦湾という、ちょっとへっこんだところがあります。こちらに漂着したと、その時に祝島にそこに 3 軒家があって、貧しい暮らしをしてただけけれども、助けてあげて手厚くもてなした。そのお礼に今度は伊美の方が祝島の人に農耕の仕方とか、神様のお祭りの仕方とか、そういったことを教えてくれて、徐々に祝島もだんだん農業が発達して行って、だんだん、裕福になってきたというところから今度はまたそれのお礼で毎年、毎年「お種戻し」という形で祝島でできた作物なんかを伊美の方に持っていき、ありがとうございましたという形でお礼をしたというところから始まっております。4 年に 1 回、大きな祭りでその海をわたる祭り神舞が行われるわけですが、「お種戻し」は今でも毎年行ってます。神舞は今、4 年に 1 回ですけども元々は占いとかで次にいつやるかを決めていたみたいで必ず 4 年に 1 回というわけではなかったようです。5 年に 1 回だったり、6 年に 1 回だったりしたこともあると思いますけれども、三浦湾が舞台ですけども、ここに今はもう人家はありません。反対側の地図でいうと、本浦と書いてます。反対側の方です。右端の方ですね、こちらに家は固まっておりますので、そちらの方で仮神殿をつくって、神楽、お神楽をやるということになっております。もともとの由来から、まず伊美の方から船で、お迎えに行きまして三浦湾に 1 回入ります。こちらで一度神事行って、その後、本浦の方にまた船で渡って行って、入船行事、入船神事というのが一番最初の日にあります。神舞は現在では 5 日間、最初の日が入船・入船神事というのがあります。3 日間、あと参りの日があります。一番また最後の日に出船行事があります。この写真が伊美別宮社の方から一行の人達、神職の方、それから里楽師の方、神楽を舞われる方ですね、乗せて船でお迎えにあって、祝島に向かって船で海を渡って行くわけで、これが三浦湾に入ったところです。この時に祝島の方から權伝馬という伝馬船、20 人ぐらいで漕ぐんですけども、伝馬船でお迎えに行くという行事があります。一度、三浦湾に上陸しまして、ここで荒神祭、もともとの由来となった場所、荒神様というのがあります。荒神山というのがあります。そちらの方に向かってこういった神事を行います。それからまた再び船に乗りまして、本浦の方に向けて出航していくわけで、こてがわの本浦の方にやってきて、入船神事というのが行われるんですけども、これはあの人家の沖をですね、その御座船、それからいわゆるそこから迎いに出た權伝馬、それから漁船なんかも繰り出して、数十隻繰り出して 3 周ほど回ります。後ろ側に写ってるのは岸壁な

んですけれども、もう人ばかりでずっと岸壁が埋めつくされるような状態で、神舞の中では一番華やかな時ですね、一番わくわくする時です。船の中で伊美から来られた里楽師さん達がお囃子とかをやってるわけですね、その音楽を聞くと、祝島の方は血が騒ぐというかですね、いよいよ神舞が始まったということで非常に盛り上がるところです。これは、權伝馬の写真ですけれども、權伝馬の前と後ろに祝島の若者が踊るわけですね、これ、あの非常に祝島では名誉なことなんです。今はもう人が少ないんで、なかなかこの踊り手の方が少なくなっちゃったんですけれども、かつて人数多い時は、この踊りをやるというのはものすごい名誉なことでもなかなか踊ることができなかったというふうに言われてます。これはもう、あの3周まわる輪をといて港の方に向かって入ってる場所ですね。まず權伝馬が港に入って橋を海岸等の御座船、神様が乗ってる船との間を橋を作って行くわけです。その橋を渡って海岸に上陸するわけなんですけれども、この写真は祝島の方で待ってる巫女さんですね。巫女さんは、祝島の小学生、中学生が巫女さんをやっております。その後ろにしゃぎり隊という三味線と太鼓の部隊があります。バンドみたいなものですね。祝島ではお祝いごとなんかの時にこういうしゃぎり隊というのが出るということです。これがその港に入ってきたところです。港に入ったらこのしゃぎり隊を先頭にして、仮神殿というのをつくっております、そちらの方へずっとねり歩いていきます。こんな感じで仮神殿に入っていきます。こちらが仮神殿の中になります。仮神殿はあの神楽を舞う場所なんですけれども、祝島の竹と茅を使って、その年に造るわけですね。これがけっこう大がかりでもう2月ぐらいから準備がはじまります。次は来年なんで、来年の今ごろはこの準備を始めるころなんですけれども、まずこの仮神殿に入って神様を鎮座させるわけですね、神の間に、それからそこで舞場でそういう舞が行なわれます。聞くとところによると、神舞で舞うのはかなり多くて、30数種類、舞の種類があるというふう聞いてます。これはあの踊るのは、伊美の方なんですけれども、伊美ではなかなかそれを舞う機会というかそういうのがなくて、祝島の神舞でしか踊らないのがほとんどだっていうふう聞いております。これは祝島の外風景なんですけれども、こういう石を使った練塀、石積みの練塀ということで有名なんですけれども、そこにしめ縄をずっと渡して、島の人家全体が神聖な神様をお迎えする場所の形になります。これがその仮神殿、舞うところの遠景です。祝島から竹を山から切り出して、これを釘を一本も使わずに縄で組み上げていきます。だいたい神舞は今はお盆の後にやることになっておりますけれども、もともとは旧暦の8月1日にやることになってたんです。今はその日程はなかなかお盆の後でないとい人が集まらないということでお盆の後の8月16日からということになってるんですけれども、こういう仮神殿を神舞のために作ります。でこれ仮神殿の前の鳥居の所ですね。鳥居にちょっとがくがかかっているんですね。ちょっと小さいんですけれども、これ大歳御歳というふうに書いてます。大歳御歳というのは農耕の神様ですね。これ五穀豊穡を願うということで五穀の豆とか、そういったものががくが作られております。これはあの仮神殿の中を飾ってるきり飾りというものです。これの中身、ちょっと見えづらいかもしれませんが、かつらぎ大明神とかすみよし大明神とか神さまの名前が書いてます。この神様は祝島の中の十六神といわれる神様が土地、土地にありまして、その神様の名前の切り飾り、これもか

なりの量をつくります。祝島の人が一とつひとつ手で切って、こう作っていくわけですね。こういう作業もあります。これ実際に踊ってるところです。祈願神楽、いろいろ神楽のある中で、祈願神楽というのが一番人気がある、というかこの鬼が出て来て、その鬼が暴れるわけです。これを神主さんが言い諭していくわけです。けれども、この鬼が棒みたいなものを持ってるんですね。これ祝島では鬼の棒、というふうに言うんですけども、これに祈願をかけて、島の人が祈願をかけて、その鬼の棒を後でいただくわけですね。で床の間に飾って次の神舞まで床の間にお守りがわりという形で床の間に飾っておく、そういうものです。これ前回の2000年の時の神舞の写真ですが、かなり派手に暴れておりまして、観客席の方まで飛び降りてやっていると、非常に場内がわくと、祝島の方は非常によろこびます。それからこれは子太夫さん、子どもの里楽師さんですね。これもなかなか祝島では人気がありますね。子太夫の舞です。子太夫さんと先程出た巫女さんですね。巫女さんだいたい同年代ぐらいになりますんで、また何年かたってまた神舞があった時に再会したりして、昔話をしたりして、交流しているということもうかがっております。これはですね、見物する客席の写真なんですが、こちら地元伊美の方が最後の日ですね、出船の日に来られて、舞をいっしょに見てるところです。これちょっと休けい時間だと思うんですけども、今まで伊美の方が祝島に、実際に見に来られることはなかったんですね。祝島に行ってあの人達はいったい、何をやってるんだろうというふうに思われた方もけっこういると聞きましたけれども、平成8年の時の神舞の時から、伊美の方がフェリーに乗って来られるようになりました。これが最後の日の出船のシーンですけども、同じように港の人家の沖を漁船とかがグルグル回るわけですけども、左端にちょっと写ってるフェリーみたいなオレンジ色ののが写ってますけれども、これが姫島丸ですか、第2姫島丸ですか、伊美の方が乗ってこられたフェリーですね。伊美の方もいっしょにこうやって見守りに来た、岸壁には祝島の人、それから船の中では伊美の方が、お互いにまた4年間会えないけれども、元気でやってくださいということで別れを惜しんで、そして伊美の方に船は帰っていくという感じですね。次の神舞は来年2004年になっております。というわけで神舞の紹介をさせていただきましたけれども、次、祝島ネット21の話をちょっとさせていただきます。私は大学を卒業してから関東の方にいたわけですけども、1997年に実は祝島ホームページを作ったんですね。当時、祝島は今どうなってるんだろうと、離れてるとなかなか分からないんで、そういった何かどこにいても祝島の情報が手に入るような手段はないかなあと思ったところ、当時ようやくインターネットを一般の方が使い出したという時だったんですけども、これを使えばできるんじゃないかなあと思ったんです。ただ、その時はだれかそういうのを早く作らないかなあと思ってたんですが、どう考えても誰も作りそうにないと思ひまして、とにかく自分で作ってみようと思って作りました。そうすると、徐々にインターネットを使う人が増えてきて、島の出身者の人とかもそれをつないでみたら、とりあえず検索エンジンで、「い・わ・い・し・ま」とか入れてみるわけですね。そうすると出て来るわけですね、いろいろ年代は違っても祝島の出身者ということで私のところにメールなんか届くようになっていろいろ交流、まあ祝島の出身者の交流が始まって、いろいろ話をした、2000年になるちょっと前に私、祝島にUターンしてきました。ちょうど2000年の神舞があ

るっていうので、もうすぐ 21 世紀になるというので、まあちょうどいいやというきりのいいところで帰ってきたわけですけれども、そこで先程の神舞がありました。神舞の最初から最後まで準備から最後まで見たというのは実はその時が私は初めてなんです。子供の時はただ遊んでるだけっていう感じ、その後島を出てからは神舞には帰ってくるけれども見れるのは最初の1日か2日だけしかいないですから、準備のところなんか見てないんで、その時初めて見たんですけれども、かなり大変な準備が必要なわけですね。山に木を切りに行く、竹を切りに行く、それを組み上げていくと大変な準備が必要。ただそれをだんだん、だんだん島の人達は歳をとって高齢化も進むし、人も少なくなってる。いつまでこれが続けられるかなあという危機感みたいなもの、もう1回は大丈夫だけど、その次はどうなんだろうって考えたら、ちょっとこのままでは難しいんじゃないかなあと思いました。同じようにそのとき島に帰ってきた人達もやっぱり感じた人もけっこういたみたいでなんか普段島にいらなくても手伝えるようなこと、その神舞の時にはこういう手伝いが必要です、という情報が流れてこないから、なかなか手伝おうにも手伝えないという話があって、なんかそういう島の外に出た人と島とのつながりを作りたいと思ったのがこの祝島ネット 21 というボランティア組織を作ったきっかけになりました。せっかくだから 2001 年になる、2001 年の1月1日に作ろうということで急いで作ったんですけれども、最初 30 名が集まりました。昨年末の 2002 年の 12 月では 48 人会員がおります。その中で実際に祝島にいる人は私を含めて 8 人です。あとの 40 人は祝島の外にいるわけです。なかなか外にいと、やっぱり手伝いもできないんで、ちょっと大変な部分もあるんですけれども、そうですね、まあ島おこしとかそういう神舞という文化を継承していく、そういった活動なんか役に立っていきたいという目的でつくりました。今までどういうことをやってきたかといいますと、まずマラソン大会をやりました。夏にですね、神舞がある年ではまだ経験してない人ですけど、去年、一昨年からは祝島不老長寿マラソンというのを始めました。13 キロと 2 キロ、祝島小さいですから、そのぐらいしか距離が取れないんですけれども、だいたい参加者は 130 人です。本来は 100 人ぐらいですが、無理に 130 人ぐらいつめ込みました。やっぱり去年 2 回目だったんですけれども、1 回目に出た人、リピーターですね、だいたい 30 パーセントぐらい、また来てくねまして、特に 1 回目の時は人づてに頼んで元オリンピック選手の宇佐美さん、オリンピックに 3 回出場された宇佐美さんもわざわざ祝島まで参加していただきました。非常に盛り上げることができました。これまあ毎年やっていこうと考えております。それから島の中での後は地道な活動で、春、秋、冬に山歩き、山歩きの会を開催したりとか、祝島のカレンダーをつくったりとかそういったいろんな事業を手がけております。目的としてはその神舞とかそういったものを継承していくのがもともと目的なんでそれに対する取り組みをこれからどうするか、特に来年が神舞ですから今年からそれに向けての準備をしていききたいというふうには考えておりますけれども、今、どういうふう具体的にやるかというのはこれから進めていくところではあります。

(佐藤) はい、どうもありがとうございました。神舞の伝統的な行事の詳細に渡りまして、ご紹介いただけましたし、それから今、取り組んでおられる祝島ネット 21 ですね、その話

しをしていただきましたけれど、祝島とこの伊美を繋ぐ4年に1度のですね、交流ということで和田さん、こういう地域の方ですので、もちろんご覧になったことがあると思いますけれどもいかがですか。

(和田)私は小学校の時に漁師の方の船に乗せてもらって、出船行事の時にですね、参加した記憶があるんですけども、グルグル、グルグルと姫島と伊美の間を回って、漁師の方のたくさん大漁があったというか、旗を立てて出ていく御神船を見送ったわけなんですけど、わあすごいという記憶があるんです。それから前回の時は一般の方も行けるとのことだったんですが、私はちょっとその船に乗れませんでした行けなかったんですけども、今のこのビデオを見せていただいて、すごくいいなあと思いました。そして、これほど伊美別宮社の神様を扱っていただいている祝島の方に感謝を申し上げたいと思いました。また、これだけのすごい伝統を継承している國弘さんたち祝島の方に感謝申し上げたいんですけども、これをぜひ続けていただきたいし、また、こちらの伊美の方々も、もっと理解を深めて、見てない方はわからないので、ぜひこちらの国見町民の方々にもこういうビデオを見る機会を設けていただいて、この伝統行事をずっと続けていただけたらありがたいなという気持ちで今見ておりました。

(佐藤)国東半島は仏教文化も非常に厚く蓄積しているとかでございまして、修正鬼会とかですね、六郷満山文化に根差したいろんなイベントがあるところがございます。息子さん、今までのお話をお聞きになって、JTBで旅行のお仕事をされてるわけですけども、そういう旅行のプロという、そういう立場からごらんになって、いきなり観光ということにならないかもしれませんが、交流のきっかけになるようなことはお感じになったんじゃないかなというふうに思うんですけども、まあ、そういうことも含めて、あるいは日ごろのお仕事も含めてご紹介いただければと思いますが。

(息子)JTBの息子と申します。よろしくお願ひします。みなさん、やっぱりですね、まちおこしで非常に力が入っているということで私の場合はどっちかといいますと全般的な大きい流れの話になりますけども今、国内旅行を例にとればですね、国内も海外もそうなんですけども大きい流れはいわゆる団から個の時代に完全に入っている、ということでありまして、法人マーケットが非常に縮小している、ライフスタイルも変わりました。一言でいえば、やはり旅行自体が身近になっています。非常に身近になった一つはまあインターネットあるいはメディアがですね、いろんな旅番組をなさっている。そういったつくる旅とですね、今、みなさんが発表なさったのはまだまだ隠れたこれから伸びていこうという、要するに一人ひとりが参加できる、みな、そういうところを探しているわけだと思いますね。今、お客様のニーズが非常に多様になったと、昔は十人十色といわれましたが今は一人十色の時代になっています。我々、旅行業界と申しましょうか、業者といたしましてはですね、それにどう対応できるか、それもスピードをもってということが今、最大のテーマであります。先程のですね、国内の変化でありますけども、昔は観光中心だったものが

今、発表されました中にもありましたけども、手づくりのもの、体験ですね。体験あるいは癒しという言葉が今、非常に流行っております。今日、あの徳山から周防灘フェリーで参りました。いつもいろんなところで、飛行機、新幹線、車で行きますけれども、久しぶりに船の旅と非常にあの2時間がですね、安らぎがありましたし、久しぶりにいろいろ考えるというのんびりした時間をいただいたような気がします。ということで今までの観光ではなく、癒しを求めて今は和風旅館とかですね、いいホテルに泊まっておいしいものを食べて、観光ではなしにのんびりするということがまず、傾向としてあります。あるいは海、山、そういったところのリゾート地でやはり滞在と外国の方はですね、非常に観光地に行くと、じっくりと本を読んだり、あるいは部屋に帰って寝たり、日本の方はですね、7時に起きて、食事をしてすぐ観光へ行ってせっかいいいホテルへお泊まりになられても夜の6時ごろホテルに着いて食事をとって非常に行動派ではあるんですけども、そういったのからだんだん滞在型に変わってきてると、あとはテーマを楽しむということで体験的なもの、先程発表されてましたもの、あるいは歴史・文化そういったものをもう一回見直すと、自分の生まれ育ったところの再発見、あるいは最近は自然を楽しみ、環境を学ぶというエコツアー、ハイキング、トレッキングですね、こういったものあるいは趣味の世界、今、貸し切りバスのステッカーを見ても、何々会社っていうの非常に減ってます。ほとんどが何々会という趣味、あるいはそういった同じ共通をもたれた方の旅行が増えておりまして、特にゆとり世代と言いましょか、熟年層の活躍が非常に目覚ましい。これから超高齢化社会になりますけれども、以前は女性同士で旅というのは、ほとんどあまりなかったですね。まあ、お父さんが働きにいて、お母さんが家を守る、とこういった状況が続いたのはですね、今、お父さんが外で一生懸命働いて汗を流す。お母さんは近所の人といいところへ行って、いいものを食べて、のんびりする。こういうのが典型的でありましてですね、年に何回もそういった女性の方でもテーマを持って、サクラであるとか今であれば流氷とまさに網走なんかはですね、冬は誰もいかなかったというのが、今は冬の方が観光客がひょっとしたら多いんじゃないかと、流氷船に乗れないと満員でそういった状況もありますので、今、みなさんが発表なさった中に今後ですね、今すぐどうかと言えば、なかなかプロモーションの問題とかですね、まあ一番は国東半島の場合は徳山から来てですね、今そういう個人化思考、あるいは個人の自由に、という場合は、今日もそうでしょう、フェリーについてですね、先程言いたいことは先生がみんなおっしゃられましたけど、アクセスがあるのかとそうしないと我々は店頭ですね、お客様がお見えになって案内する時にわかんないわけですね。時刻表見ても載ってない、そういった時に今日こちらへ出させていただく前にですね、社員全員集めて聞きました。店頭で国東半島売れるかと聞きますと、別府はたくさん出ますと、ほとんど素通りで、あるいは車で行くんじゃないですかと、フェリーで行きたい人もいっぱいいるでしょう、その場合、アクセスがないと。シャトルバスというのですか、最低バスは先程、先生のおっしゃられましたようにタイムリーにですね、最低フェリーに間に合う時間で、小さくなっていいと思うんですね。今、こういう時代は、それを民間が費用対効果でできなければ、無責任なことを私が言うかもわかりませんが、市とか町とか、そうバスがあればまず試しに走らせてみると、それがいわゆるあの9人乗り

ジャンボタクシーをですね、乗り合いタクシーみたいにして、1人いくらというようなことで、アクセス整備しない限りはいくら立派なものがあっても、後はまあプロモーション、せっかく隣にいらっしゃいますが、昭和の町という、これはテレビで言われましたからおそらく金谷さんも休みがないくらい、ものすごく湯布院に次ぐですね、そのくらいの今秘めてますね。そういったものへの港からバスを出すとか、あるいはそこから最低まあ日豊本線にアクセスを出していただくとか、強いて言えば、どれだけいらっしゃるかわかりませんが、最終的には別府ですね。だから日本の源泉の10パーセントが別府にあると言われてますけれども、やはり日本人は温泉好きですから、そういった点と点で線を作っていくって、面を作って、あるいは湯布院、黒川と今の流れありますけども、そういったところに今、国東はだんだん自転車とかいろいろやってられると思いますが、やるのは非常にむずかしいと思います。それをしない限りはなかなか今のお客様の年齢層、あるいは趣味・趣向、そういったゆっくりこちらでそういう発表なさったようなことをして、あるいは観光して、ゆっくり泊まる、ということ全体を考えていかないとなかなか個人、一施設ではですね、なかなか競争相手、同じようなところが多いですから、負けるんじゃないかと思います。アクセスの問題が一番だろうと思ってます。

(佐藤)はい、どうもありがとうございました。まあ、癒しとか滞在型とかあるいはテーマ性をもった観光、エコツアー、一人十色というこういう現在の観光のトレンドを語っていただきましたけども、最後に強調していただきましたが、やっぱりアクセスの問題ということでしょうか。国東半島は特に私も見ておりますとほとんど個人旅行、というか、あるいは2人、3人の旅行で福岡とか北九州、あるいは広島ですね、ナンバーがついた車でですね、家族あるいは友達と旅行してるのがほとんどでございますね。国東半島はただまあ、いろいろ息子さんがお話になったようなカテゴリーに相当するようなそういう観光地、あるいはそういうイベントがですね、あるとそういうことだろうと私は思います。それでアドバイザーの米村先生にちょっとおうかがいしたいんですが、先生の基調講演の後半部分でずいぶんグルッと海交流というお話がございました。実は、神舞はもう数百年前からグルッと海交流であるというふうな印象をもって私、聞いておったんですけども、その神舞、それからその他の地域おこし、いろいろまちづくりをやっておられるわけですけども、こういうものを含めて交流という観点からですね、何かまとまれるものはないかと、あるいは私も交流だとかいきなり観光というふうにいいたい部分があるわけですけども、なかなかそこまでストレートにいきにくい部分もございます。感想をふくめて、その辺をおうかがいしたいんですが。

(米村)2点ばかり申し上げております。まず最初の神舞ですけども、これはグルッと海交流というよりもですね、私はまだ実際には現物を見てないんですが、ベネチアが、海のフェスティバルってものすごく華やかなことをやってるんですね。かつてベネチアがああ周辺に君臨してた時代のなごりでやっぱり船を中心に、堂々と港へ入ってきてやるということなのですが、もうこれは観光ベネチアのハイライトの一つというふうになります。神舞ってのも

恐らく私はやりようによってはそういう筋がものすごくある。つまりよそから来て見るに値するものだという感じがしますね。ところが私はたまたま上関の方にもちょっと出入りしてたものですから、知ってたんですが、例えば周防大島ぐらいになるともう知らないんですね。神舞のことあまり知ってる人いない、ほとんどいない、というようなことで情報がなかなか発信されないということと地元の人達はそういうのは自分達の行事だから何もそんな外でというような感じだと思いますが、これは東京周辺でいうと、秩父の火祭りとかです。そういう神事が観光につながってくればいくらでもあるんですね、まあ先程、息子さんの話じゃないんですけども、そういうのこそ、やっぱりおもしろいというような時代になってるんじゃないんですかね。ですからそういうことが重要ではないかと感じがします。それから、交流というのは、私ちょっと観光というよりももっと日常生活的な生活を広げると、だから、例えば、山の子どもが海を体験するってことですね。ある海の子どもが隣の島に行って、その島のことを知るとかというようなことをむしろベースにして考えるというようなことでいいのではないかと、で、これは息子さんのようなビジネスには逆にあまり関係なくなるかもわかりませんが、例えば地元の漁師さんがまあ、そんなら今度の休みの時に子供たちを乗せて行ってやるよということを思っただけで、実はできるようなレベルのものであると、ですから、地元の人達が手づくりでやろうと思えば、いろんなやり方ができるということがあると、まあ海に関してはそれくらいにしようと、それからもう一つ、息子さんのいわれたアクセスの問題はですね、国東半島も私思うにですね、例えば、たぶん観光客ということで考えると、福岡の人達、例えば 100 万都市に住んでる人達の中で、先程から出ているような一番金と暇のある人達、あの中年の子離れしてですね、ダンナがまだ働きざかりの奥さん達というようなお客さんは実はほとんど拒否しているに近いということだと思うんですね。たまたま車で来れる人はいいんですが、地方の人が思ってる以上に、都市のご婦人はですね、みんな車で遠出するなんていうことは思いもよらない、つまりダンナを駆ぐらいまでは送っていくけども、高速道路をとばして、どっか遠くまでいけるなんてのはよっぽど勇敢な女性でない限りはですね、ありえない。それから、そもそも車をそんなたくさん持ってるわけではないし、日常的にはせいぜい買い物ぐらい、だから知らない土地にいて、そこでレンタカー借りればいいじゃないか、なんてそんな自分が乗ったこともないような車を運転して知らない道を走るなんてのも思いもよらない、ということになると、さっきいったように公共交通を使うんですね。私の母親が実は76歳ぐらいの時にダンナが亡くなって、その後、せきを切ったように旅行をし始めたんですね。今でも月に2回ぐらい、今は84歳ですけどね、やってるんですね。最初の2年ぐらいは格安ツアーパックがいいって言うんですね。そのうちあれはつまんない、お土産持って、連れていかれて、まずい飯食わされて、相部屋で不満タラタラなんですね。今はどうしてるかっていうとやっぱり息子さんがおっしゃったやつで、ご近所の人で、たまたま車の達人が1人いるものですから、その人の車に乗っけてもらって行くと、そのグループしょっちゅう出かけるものですから、とうとうその車をもってる奥さんはもうひとまわり大きい車に買い換えて、でたまたまそういう人はいいんですが、そうじゃない人は恐らく本当は電車で行って、地元にもうまくローカルバスが走ってれば、それで行って、おいしいところのお店にでも入って、

ベチャベチャおしゃべり、おしゃべりと食事ってのが一番楽しみですから、そういう環境は地方の観光地に来るほどないですね。だから、先程の話、フェリーで降りて、途端に途方にくれる。これは実は観光客にとっても不幸かも分からないけれども考えてみたら地元ですね、例えば高校生以下の子ども、それから、もう車の運転はめんどくさくなったお年寄りにとっても、まったく実は同じような環境である、ということを考えてですね、福祉という観点から見ても、あるいは教育とか、子供たちにもっとダイナミックに活動させようということからしても本当、地域交通がちゃんとあれば、それを利用して観光客を移動すればいいですから、そうするとたぶん商店街の活性化なんかもそういう中でリンクすれば、またおもしろい商店街の活性の仕方もあるとということで、これはぜひ考えてあげるといいんじゃないかと思います。

(佐藤) はい、どうもありがとうございました。それで先程の順番で5人のパネリストの方々に2分から3分程度で、交流・観光についての抱負と提言ということで、おひとつずつお願いしたいのですがいかがでしょうか。和田さん、お願いします。

(和田) 昔と今とこれからという感じで私ちょっと思ったんですけど、昔はすごい交流があったんですね、この辺。伊美港もそうですけど竹田津、それから今日、真玉町長、香々地町長さんいらっしゃいましたけれども、恐らく香々地も真玉もだと思うんですが、船の交通ってのがすごかったんですね。昔は船でたくさんきてたんです。熊毛、岐部、来浦、富来とすごく栄えてまして、そちらの港の方にもたくさん大きな家が残っております。旅館それから普通の今、個人の家になっておりますけど、どうしてこういうふうに大きな家が海岸にあるのかと思うと、昔はとても栄えていた。けれども、トンネルができ、道路ができ、車ができ、終戦後ですね、どんどん車が走りだして、衰えていったということなんですけど、そういう過去は、もっと大事にして、今日、山口県からいらっしゃってますけども、国見町にも、熊毛、小熊毛というところがありますが山口県にも熊毛町っていうのがあるということもそういった深い繋がりがあったのではないかと思うんですけども、そして今ですね、国東半島は変わりつつあります。で、となりの高田の金谷さんも豊後高田市のことを話されましたけれども、国見町にもたくさんのギャラリー、工房ができて、それから国東半島にもたくさんの温泉施設ができました。昔のイメージの国東半島だけではない新しいものがいろいろとできております。で、それをいっしょに宣伝することも今、大事な課題だなあと感じておるんですけども、私も周防灘フェリーをよく利用してですね、船を渡って光市に表具の文化台を修復する先生がいらっしゃって、休みの間に行くんですけども、船はいいなあと船旅の心を癒される気持ちというのは2時間ちょうど今日乗ってこられた山口県の方も思ったと思うんですが、こちら国東半島から徳山に着くと石油コンビナートの工場地帯で全然、違ったところっていうのがまたいい。今度帰ってくる時ですね、石油コンビナートを見ながら今度は姫島からきれいな文殊仙寺や両子寺を眺めながら癒される自分自身なんですけれども、それはきっと徳山から広島、ずっと工場地帯が繋がっている。町の方々はこの経験をするといいなあって思うと思うんですね。涛音寮に来ら

れた山口県、それから広島県、岡山県の方々はすごい感動されて、1回来られた方はまたいらっしゃいます。そう、こうギャップっていうか、今の疲れた心を癒す国東半島という昔の国に戻るような、それがもう確実に2時間の船旅で経験ができるというおもしろさを周防灘フェリーさんも宣伝して、ぜひ国東半島をこれから観光を宣伝していただきたいと思っております。

(金谷)私の場合は、さっきお話したように死にかけてた商店街が昭和の町ということでそこに住む商人達もそしてまち自体もちっちゃなまちですけども、なんとか元気をとり戻してまいりました。次はいよいよ国東半島の西の入り口であるそのちっちゃなまち、豊後高田の町がですね、どう広域的に連携をしていくのかということが課題と考えられると思います。簡単に申し上げますけど、私どもこんなもの作っております、国東千年ロマンという、ちっちゃくて遠くからご覧になり辛いでしょうけれども、国東半島、山と里と2つのまちに空間を分けております。山は六郷満山の仏教文化のある国東半島の一番内心部分でございます。それを外心的に囲む形で里の世界があります。ここは東大とか早稲田の先生方のご研究によって中世の村の姿を色濃く残しているということでいわれております。で、2つのまちというのは東側の入り口杵築のまちでございます。ここには近世の城下町、江戸時代の城下町がございます。そして私ども豊後高田のまちには、現在のまちというか、昭和の町というか、そういったものがあるということで山と里と2つのまちという空間をですね、山の古代、里の中世、杵築のまちの近世、豊後高田の昭和の町ということで、千年ロマンをタイムトラベルしてもらいたいといったようなプランをもっております。ぜひとも、ちっちゃなちっちゃな豊後高田の昭和の町から、国東半島全体に連携の輪を広げて、さあその次はいよいよ海をこえて山口県の皆様との交流だなあとということで今日は大変いい勉強をさせていただきました。ありがとうございました。

(宮坂)みなさんのご意見をそうだ、そうだとお聞きながら聞いていました。うまくまとめることはできないんですけども、ここに来るにあたって、夕べ寝ながら考えたのは交流の中に私は遍路とそれからホームステイ、という言葉を考えてんです。遍路というのは今、福岡でなんかやってるようですね。遍路についての展示会みたいなのが、そして永六輔さんが歩いて知らないまちにいき、人と出会う、外へ出て、歩きましょうっていう講演をなさったようなんです。私は旅行に行くのが好きで海外にもけっこう行きましたし、国内も北海道から宮古島ぐらいまで行きました。それも旅行だし交流だけれども、毎日、毎日少しでも自分が興味をもって見て歩けば、それはもしかしたら立派な交流にもなるし、旅にもなると思っています。ホームステイは子供たちが語学留学とかで、親達はホームステイすると喜ぶようですけども、外国へ行くだけじゃなく、さっき米村先生もおっしゃったようにいろんな子供たちがホームステイして農作業を手伝うとか、それから山の木を切るとかそういうのがもっと広がったらいいなあと私的には思ってるんですけども、うまくまとまらなくてごめんなさい。

(國弘)まず祝島とこちらとの交流をもっと深めようってところから考えると、私、一番いいのは、今、4年に1回行ってる神舞ですけれども、毎年「お種戻し」という行事もあるんですね。これをもっと交流に使えないかなあというふうに思ってます。神舞そのものはもうたぶんやるだけで精一杯なんですよ、今。で、「お種戻し」はまだたぶん余裕があると思えますんで、この機会をなんかうまく使えないかなあと思ってます。それから、まあ全般的な提案になりますけれども、その地元の方のガイド、どこに行こうということをやりたいんだけど、そこをガイドしてくれる、そういう人達をその地元で何人が育てていって私達も祝島でやろうとはしてるんですけども、まあ、よそから来た人が山を歩きたいとか海に行きたくて釣りをしたいとかそういう恐らく国東半島ではいろいろやることもあると思うんですけども、そういうこういうことをやってみたいというふうにやったら、そのガイドさんが簡単に見つかるっていうかな、そういうシステムみたいなものを組み上げていったらどうか、まああのJTBさんがそういうガイドさんと契約して、こうツアーとかね、そこに申し込めば、何ができるとかいう、本当に十人十色じゃなくて、一人十色ですか、そういう話しが先程ありましたけれども、そういうニーズに応えるような感じでやっていただくのはどうかあというふうに思ってます。

(兒子)さっき言いましたが、アクセスのための受け皿づくりですね、今まで見る、食べる、遊ぶという中で今度は暮らすというのがそれに一つ入ってくるだろうと、その中でやっぱり地域交流でありますので、まあキーワードは一緒にやる、と地元の方と来られる方が一緒にやるとその面ではですね、先生、先程いわれた、竹田津港の整備、海の駅とかですね、あるいは食事場所ですね、名物で何か大きくななくてもいいのか、とやはり何時間かけても今、食の時代、食べに来るお客はいるだろうと、後はターゲットを決めれば都会の熟年ですね。今言われた、これはあのロングステイですね、村での生活と一緒に地元の人とですね、無農薬栽培をすとかガーデニングをすとか、漬物づくり、碁、将棋、まあ第2の人生をですね、リタイヤされてスタートする前の方でものんびりできるし、あるいは移住するかもわからないというようなことをですね、それからあの目先をかえれば学生であれば野菜や稲の収穫、あるいは地引き網、体験学習ですね。山村でのホームステイもそうでしょう。それから後は長い目で見れば外国からのお客様、これからどんどん増えてくると、そういった方との何かきっかけはできないかなと、特に中国、あれだけの市場があるわけでありまして。後はまああの箱ものをつくるというのもですね、大事でありますけれども、やはりあるものを、今あるものをいかにして工夫して育てていくかということで、もし今度そういった箱ものをつくるのであればですね、国際的にいえば、バリアフリーの時代ですから、地元の方も高齢化が進んでいく、来られる方もそういった時代になっていくわけですから、国際的にやはりバリアフリーがこれから必要になってくるといって、ちょっとあの大きな話かもわかりませんが、以上でございます。

(佐藤)ではあの米村さん、簡単にご感想を1、2分をお願いします。

(米村)簡単にですね。日本にあって、ヨーロッパにない観光のですね、まあ、仕掛けの一つはですね、日本だとよくジャリトラを個人でダンプカーを持ってやっていますね。あの調子で観光バスを個人で投資してもってですね、ガイドもある程度できるし、たぶん、あのJTBさんからのそういうところ、ヨーロッパ旅行なんかでうまく使いこなせていると思うんですが、そんなビジネスが結構あるんですね。いいバスを自分で投資して買ってですね、それで手ぐすね引いて待っている。お客さんが団体で来たら、それを乗せて自由に案内できるというような、そんなのは実は公共交通が一方であると同時にそういう個別のグループのニーズに応じて、自由にその移動できるというようなことを考えるとバスとか船とかそういう使い方もこれから出てくるんじゃないか、いずれにしても地元のそういう受け皿があって、そういうことと繋がるというのは非常に重要でこれからみんなで考えるということではないでしょうか。

(佐藤)はい、どうもありがとうございました。パネリストのみなさん方、それからアドバイザーの米村さんにはちょっと急がせまして大変申しわけございません。今日は周防灘を介した交流と観光を考えるということで1時間半にわたってご議論いただきました。まとめてみますと一つはですね、連携・交流のためのこの拠点づくりといいいますか、あるいは動機づくりというか、それがまあ、一番大事じゃないかな。で、そのところで出て来るキーワードは再生と新生ということで、和田さんは涛音寮という、まあ非常に地域ของですね、特徴のある建築を再生させる、そしてそれを使う、さらにはそれが波及してですね、いろんなギャラリーがですね、国東半島にちりばめられているということでございますんで、これはまあ新生ということになるかもしれません。金谷さんは昭和の町づくりという、非常にインパクトのあるですね、まちづくりをしておられて、最近はですね、テレビとか新聞の露出度が恐らく県内では最高になってるんじゃないかなと、湯布院を越えてるんじゃないかなというふうに思うわけですね。それから、宮坂さんは、この八咫の口を使ったですね、いろんなまちづくりをやられておられて、実は口ウといいいますと、どうしても我々、口ウソクのことを考えちゃいますけども、当然、この口ウソクもあるわけですけども、それを使って染色、口ウケツ染めというんですか、そういうこともやっておられる。まあ、再生と新生をまさにこれを体現されてると思います。國弘さんは神舞の話がされましたけども、これは数百年にわたりまして続いておる神事でございますけれども、これはやはり、新しいファクターをこの中に入れていくということもですね、大事じゃないかなというふうなご発言もございました。一つ目はですね、再生と新生、二つ目はですね、当然まあ今回は交流ということになります。潮の道をどう使うか、私はあの、米村さんの話のなかに使い方を変えるというそういうふうな話ございましたんで、これだなあというふうに思いました。使い方を変えながら、しかし、昔に帰るといふ部分もですね、必要じゃないかなと、和田さんは、海の交流といいいますか、航路を使ったですね、国東半島の地域輸送の話もされましたけれども、実はあの国東半島の東半分の方もですね、昭和40年代の前半まで別府から安岐、武蔵、国東、伊美をですね、つないで姫島の方に行くルートがございました。あの姫島航路とっておりましたけれども、これはあの陸上輸送におされまして、すでにそれがストッ

プしてから 30 年以上経つわけですがけれども、私達はそういうですね歴史的な交流を思いおこす必要があるんじゃないかなと、金谷さんは海の連携をする前にまず地域と地域の連携、陸の連携をですね、一つやった上で、というふうな話もございました。私は米村さんの話をうかがいながら、瀬戸内、特に西瀬戸地域のミニクルーズと言いますかね、ブルーツーリズムという話もございますけれども、ミニクルーズをやっていく必要があるんじゃないか、先程、あの農船を使ってあちこちの島を巡っていくという非常におもしろい話をされましたけども、私はそれをもっと発展させてミニクルーズというですね、キーワードを今回はですね、提言したいなと思ってます。それからあの 3 番目は確かに海の連携は大事なんだけれども、海と陸の連携ですね、これが大事だということで、アクセスという話もございました。個人輸送システム、陸運法が改正されて、と言いますか、規制緩和されてですね、個人の輸送業というのができるようになりましたんで、ぜひ私は国東半島ですね、そういう個人輸送のですね、システムを作っていく必要があるんじゃないかなというふうに思っております。それからもう一つ最後に強調したいのは、これはまあ、國弘さんがやっておられるわけですがけれども、いわゆる情報通信ネットワークですね。これをやはり私は活用する必要があるというふうに思ってます。地域と地域が情報ネットワークを介して繋がっていく、それが実際ですね、海を使った交流、あるいは陸を使った交流、海と陸を使った交流にですね、繋がっていくというですね、こういうことを私達は考えておく必要がある。ぜひとも國弘さんがやっておられます祝島ネット 21 に、国東半島の方々がですね、アクセスしていただいて、相互交流をやっていく一つの大きなインセンティブになるように、あるいはモーメントになるようお願いしたいなというふうに思います。どうも今日は、パネリストのみなさんありがとうございました。それから会場のみなさん、長時間にわたりまして、ご静聴どうもありがとうございました。

6. 掲載紙

新聞記事

国東・周南(山)地域交流シンポ

国見 周防灘介した観光などテーマに

国東半島地域と山口県・周南地域の結びつきを深めようと、「周防灘30カイリ・潮の路県際交流シンポジウム」(国土交通省など主催)が、国見町伊美の町生涯学習センター「みんなんかん」で開かれ、両地域の住民ら約二百五十人が参加した。



スライドも使って開かれたパネルディスカッション

周防灘をはさんで向かい合う両地域は古くから交流の歴史があり、国見町と対岸の山口県徳山市を結ぶフェリーも就航している。一九九八年からは「周防灘30カイリ・潮の路県際交流事業」が始まり、少年サッカークラブや町づくり団体の相互交流を続けている。

周南地域の東和町出身で多摩大学総合研究所の米村洋一・客員主任研究員が「海で繋がるまちづくり・ひとづくり」と題して基調講演。続いて「周防灘を介した交流と観光を考える」をテーマにしたパネルディスカッションがあり、両地域の町おこし関係者ら五人がパネリストとして参加した。

パネルディスカッションでは「両地域の連携とともに、それぞれの地域の資源を磨くことが大切」「フェリーが国見に着いた後の交通手段をもっと充実すべき」といった意見が出された。このほか、市民グループ「周南ジャグリングクラブ」による大道芸の披露や、観光交流マップの配布もあり、人気を集めていた。

大分合同新聞 2003.2.1

国東 手をつなぐ 周南



発表するパネリスト

互いの違いPRして 住民ガイドの育成を 交通アクセス整備を

国見町で交流シンポ

国東半島と対岸の山口県周南地域の住民による「周防灘三十カイリ・潮の路(みち) 県際間交流シンポジウム」が三十一日、国見町生涯学習センター「みんななかんであった。」二時間のフェリー航路で結ばれる両地域の交流促進が目的。国土交通省、東国東地域活性化協議会、周南地区広域市町村圏振興整備協議会の主催。国東から二百五十人、周南から五十人の住民が参加。多摩大学総合研究所客員主任研究員の米村

洋一さんが「海で繋(つな)がるまちづくり・ひとづくり」の演題で基調講演した後、パネルディスカッション。「周防灘を介した交流と観光を考える」をテーマに、湯音寮館長の和木木乃実さん(国見町)ら両地域のパネリスト五人が米村さんをアドバイザーに議論した。

パネリストらは「工業地帯の周南と自然豊かな国東のギャップを経験できる面白さが両地域にはある。この点をPRしていければ」「山と海の子どもが互いの地域を体験

するレベルの手作り交流から広げていこう」「地元を案内できる住民ガイドの育成を」などと提案。パネリストの一人、JTB日徳山支店長は「国東半島には立派な観光資源を生かすシャトルバスなどのアクセス整備が不可欠」と求めた。

最後に、コーディネーターの佐藤誠治(大分大学工学部教授)が連携・交流のキーワードとして、①再生と新生の情報ネットの活用—などを示した。